

# 教会とキリスト教社会事業の協働を問う

CIFジャパン副理事長ならびに事務局長としてさまざまな活動にご尽力くださっている坂本正路さんが、このほど標記研究論文を発表されましたので、本紙に概要をご紹介いただきました。長年にわたり、福祉事務所、児童相談所、知的障がい者施設ならびに救世軍の児童看護施設で専門職や施設長として勤務されたご経験の中から、キリスト教社会事業施設とキリスト教会との関係が今後の課題であると認識され、研究を重ねてこられたそうです。坂本さんはクリスチャンとして、イエスがみ言葉を伝える事と同じように愛の業を行なわれた事を教えられたと結んでおられます。(浅野記)

坂本 正路  
東京基督教大学非常勤講師  
1971年コロンバス

## 1. キリスト教社会事業の課題

社会福祉の分野におけるキリスト教社会事業の果たしてきた役割は決して小さいものではなかったと思う。しかし近年の教会とキリスト教社会事業との関係を見るときに、一部の例外を除いてその関係は希薄であるように思える。このような現状の原因を探り出すと共に、その解決の糸口、方向性について、教会とキリスト教社会事業収容施設の双方に調査を行うこととした。さらに牧師の社会事業に対する姿勢、社会事業家の教会に対する希望、最後にキリスト自身の働きから、現代の教会の姿勢について考えてみたい。

## 2. 教会とキリスト教社会事業に対する調査

調査客体を教会、キリスト教社会事業施設、各々200を目標とし、教会とキリスト教施設(以下、施設という)に調査票を送付した。その結果、教会からの回答数は79教会(41.6%)、施設からの回答数は132施設(69.5%)であった。

### ① 教会への調査結果

- 教会の社会的活動についてはその95%が何らかの活動を行っていた。教会では聖書研究会を初めとする社会的な活動が多く教会で行われている事が明らかになった。しかし、牧師、又は神父の地域との関わりについてはその52%が無回答であり、かならずしも積極的に地域に出ていく姿勢にないことが明らかになった。
- 教会の施設に対する関わりについては寄付(61%)、プレゼントなど(29%)、ボランティア活動(27%)、教会員の中に施設従事者がいる(46%)などが多かった。
- 施設従事者の場合、日曜出勤があるが、それについての牧師の回答は、「社会的に必要とされる職業であるので認めている」が62%と肯定的なものが多かった。しかし、「出来るだけ日曜に休める仕事をすすめている」が27%あり、牧師の4分の1強は福祉従事者の日曜出勤に

は必ずしも賛成でない事が明らかになった。

- 教会とキリスト教社会事業の望ましい関係については、「教会とキリスト教社会事業がお互いに理解しようと努力し、支え合う必要がある」が78%で8割近くであった。

「教会がキリスト教社会事業に対して理解と働きかけをする必要がある」は34%であった。一方、「教会とキリスト教社会福祉事業はその目標とするところが異なるので各々の道を行くのがよい」との回答は3件(4%)に止まっていた。

### ② 施設への調査結果

- 施設とキリスト教の関係に付いては、「創設者がクリスチャンである」が92%。「理事、評議員の中にクリスチャンがいる」が88%。「職員の中にクリスチャンがいる」が80%であった。
- 施設において、牧師(神父)が礼拝(ミサ)を行っているかの間に対して、「行っている」が67%。「特別なときのみ」単独が23%であった。しかし、「特に行っていない」も6%あった。
- 施設運営の基盤としてのキリスト教精神の必要性については、「必要である」74%、「あった方がよい」22%、「なくてもよい」2件、「どちらとも言えない」1件、「無回答」2件で、96%の施設が肯定的であった。
- 施設と教会の関係について、「相互に理解する努力をすること」77%、「教会が積極的に関わること」33%、「施設が教会に積極的に関わること」20%、「あまり期待していない」4件の3%であった。
- アンケートの記入者は理事長、施設長など管理責任者が82%であったが、クリスチャンが61%、ノンクリスチャンが35%で、ノンクリスチャンの管理者も多いことが伺えた。

## 3. 調査からの考察

- この調査を通しての教会の福祉に対する姿勢を見ると、調査回答率が約4割であり、あとの6割の教会が無回答であることに、現代の教会の姿勢が現れているのではないかと。「福祉は教会に関係ない」という姿勢から、「多忙のため

回答する余裕はない」というものまで、様々であろうが教会の福祉に対する関心の低さを表していると考える。

- 教会の社会的な活動は割合盛んであるが、牧師の地域社会への関わりは半数に止まっている。牧師は外部からの人を待つだけでなく、自ら地域に出て行くという積極性が必要ではないか。
- 教会と社会福祉との関係では約半数の教会に福祉従事者がいるが、教会全体を考えるとその率は低いと思われ、教会員に福祉従事者がいることが、社会事業への関心を高めているとも考えられる。
- 回答施設の多くが定期的にあるいは特別な行事のときに礼拝を守っているが、回答のなかった施設がどれほど礼拝を守っているかを知りたいものである。
- 施設従事者の日曜礼拝に対して牧師の肯定的な回答は6割を占めていたが、調査教会全体から見ると3割弱に止まり、福祉に対する理解の深まる必要性が感じられた。
- 教会と施設の相互理解については教会と施設いずれも「相互に理解と協力する必要性」を感じているが、どちらかという教会側からの理解と協力の必要性が訴えられている。この点が今後の教会と福祉の協働という課題を解く鍵になるのではないか。
- 施設の8割にクリスチャンがいるが、この調査の回答者の3分の1強がノンクリスチャンであり、この事は、将来キリスト教施設が非キリスト教施設化する事を暗示しているように思われる。この事を教会も施設も真剣に受け止め、早急に対応策を考えなければいけない時期になっているのではないか。

#### 4. 教会の社会事業に対する姿勢

社会事業に対して教会の牧師はどのように考えているのであろうか。

- 消極的姿勢  
植村正久は次のように言った。「キリスト教徒はみだりに動くなかれ。みだりに慈善事業に狂奔するなかれ」  
島村亀鶴（富士見町教会）は「教会は宣教中心に生きねばならない。善行が不必要というのではない。神の言葉を捨てて、善行に肩代りをさせようとするのは大きな罪だ」と言っている。
- 積極的姿勢  
カトリックの本田哲郎神父は大阪釜ヶ崎において20年に亘り路上生活者の支援活動を行

っているが「宗教者達が、もっと人の痛みに敏感になって、小さくされているがゆえに本物と偽善を見分ける事の出来る野宿者達の鋭い感性や洞察力を学ぶことの方が大切なのではないか。」と言う。

渡辺英俊は「身近な野宿者の存在に教会が関心を寄せることは、教会の命に関わる課題である。イエスの生活感覚と視座は常に〈低み〉にあった。高い所から下ってきて、また高いところに帰っていったのではなく、徹頭徹尾低くされた人々と共にあった。」と言う。

以上のように教会の牧師にも全く相反する姿勢のあることが分かる。そのような中で社会事業を営むことは常に困難が存在していると言えるであろう。

#### 5. キリスト教社会事業家からの発言

一方、社会事業の実践者は教会に対してどのような思いを抱いていたであろうか。

松島正儀（元東京育成園園長・元全国養護施設連絡協議会長）は次のように言っている。

「教会には一部であろうが、教会が社会福祉に関係することも、協力の姿勢を持つことも、教会の失墜であり信仰の墮落だという見解がまだある。残念なことである。」

阿部志郎（横須賀基督教社会館会長）は「教会が偏狭な意味で中心的であることをやめ、教会自らがこの世の痛みを自らの痛みとなし、隣人に対して責任を持って生きるべく『仕える教会』になるときに、キリスト教社会事業の主体性も必然的に確立されるであろう。」と言う。

社会事業現場からの発言は多くはないが、教会に対して、もっと社会事業に目を向けてほしいと訴えていることが分かる。

#### 6. イエスの「み言葉」と「愛のわざ」の関係

イエスは神の「み言葉」と「愛のわざ」を生涯の中でどのように表していかれたのであろうか。ここに言うみ言葉とは宣教の事であり、愛のわざとは苦しみ悲しむ者への共感と癒しのわざの事で、現代の社会事業に通じるものであると思う。

イエスは生涯の中で、神としての多くの、み言葉を語っている。しかし、それと同時に実に多くの奇跡を行っている。この奇跡こそがイエスの愛のわざなのである。何故なら、奇跡は「群衆が飼い主のない羊のように弱り果て、打ちひしがれているのを見て、深く憐れまれた。」（マタイ9：36）結果としての愛のわざとして行われているからである。ここでは「マタイによる福音書」（新

共同訳)に見られるイエスのみ言葉と愛のわざに対する姿勢について探っていきたい。

まず、イエスはガリラヤで最初の福音を宣べ伝えたのであるが、同時にあらゆる病気を癒されたのである(マタイ4:23~25)。それは福音を伝えることと、人の病を癒すことがイエスの中では同じ比重を持って行われていたということではないか。この時、大勢の群衆がイエスに従ったと書かれているが、それはイエスのみ言葉よりも、病人を癒されたその行為に驚き、さらに癒していただくイエスに従ったとも考えられる。

イエスは有名な山上の説教をしている(マタイ6~7章)。そしてその直後に、重い皮膚病を患っている人、百人隊長の僕、ペトロのしゅうとめを癒したのみならず、大勢の悪霊に取りつかれた人や病人を癒している(マタイ8:1~16)。ここに出てくる悪霊に取りつかれた人というのは精神的な病を持つ人のことであろう。ここでも宣教と愛のわざが同じような比重の中で書かれている。

イエスはその後も多くの奇跡を行っているが、嵐を静めた奇跡(マタイ8:23~26)や5千人(マタイ14:13~21)あるいは4千人(同15:32~39)の人々に食べ物を与えた奇跡を行っている。これらは人生上の危機や生活上の困難を象徴する出来事に対するイエスの奇跡で、人々への思いの広さと深さを表していると言え

しみの行為をした者であるというのである。ここにイエスの弟子である現代の牧師や信徒に与えられた使命と役割があるということではないか。

## 7. 教会とキリスト教社会事業の連携における課題

イエスはその公生涯において、み言葉を語ると共に、悲しみや苦しみの中にある群衆に対して深い憐れみの思いを持ち、奇跡を通してその必要を満たし、叶えている。福音書にはその両方の姿がはっきりと描かれているが、今の教会では、み言葉を伝えることが強調されてしまっているのではないか。教会はもう一度、イエスの生き様の原点を見つめ直し、イエスの示された生き様を実行して行かねばならないと考える。

しかし、教会の中にはキリスト教社会事業に対して直接には積極的に関わっていないとしても、教会自身が老人問題、障がい者問題、児童問題、精神的な課題を持つ人々やホームレスの人々への活動を行っている教会もある。教会の社会に対する関わり姿勢には多様なものがあって、各々の教会にふさわしい関わりを持つことが求められているであろう。

一方、キリスト教社会事業は厳しい現実にジッと耐えるだけでなく、もっと積極的に教会に働きかけ、教会から物心両面の支援を受けると共に、有能なクリスチャンが働き人として送り込まれ

るであろう。

イエスの最後のみ言葉は「わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは私にしたのである」(マタイ25:31~46)であった。すなわち永遠の命に与る者とは小さい者への慈

るようあらゆる機会に呼びかけていく責任もあると考える。

## World News Winter 2011が発行されました。下記ホームページをご覧ください。

<http://www.cifinternational.com/sites/default/files/cif-winter2011-11.pdf>

### 本紙(ニュースレターNo.27)目次

NPO法人設立記念講演会開催	1
国際研修参加への4つのハードル	2
大震災とCIPの友	3
キプロス大会マーケット出品報告	3
記念講演「現代日本の社会問題を読み解く視点」	4
コメント「近隣アジアと日本の福祉を考える」	7
論文「教会とキリスト教社会事業の協働を問う」	8
[添付] NPO法人CIFジャパン紹介リーフレット	
NPO法人設立記念講演会(東日本地区)案内	チラシ

まだ会費等をご送金いただけない会員の方には、会費と法人化記念寄付の件もよろしく願いいたします。郵便振込 00270-4-54121 CIFジャパン  
または 三井住友銀行八王子支店(普)7815136  
CIFジャパン出納責任者 梶村慎吾

### 特定非営利活動法人 CIF ジャパン

事務所住所 607-8216京都市山科区勸修寺東出町75番地  
からしだね館 TEL:075-574-2800

<http://cif-japan.papnet.jp> [cifjapan08@gmail.com](mailto:cifjapan08@gmail.com)